

# 戦争と同志社

## —キリスト教主義学校の苦悩と教訓—

連続シンポジウム「同志社 150 年の歴史から展望する未来への挑戦」の第 4 回目として、今回は戦時下の同志社（1930～1945）に焦点を当てます。同志社精神（特にキリスト教主義）をめぐる解釈の変化や時局に対する妥協を、同志社内部の出来事にとどめず、日本社会や世界における変化と対応させて考え、そこから現在および未来に対する教訓を抽出していきたいと思えます。

● 日時：2024 年 12 月 20 日（金）17:00～19:00

● 場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館 RY103  
& Zoom ウェビナー

● 講演：小原克博

（同志社大学学長、良心学研究センター長、神学部教授）

● 司会：中村信博（同志社女子大学 学芸学部 特別任用教授）

● コメンテーター：

柿本昭人（同志社大学副学長、政策学部教授）

穂山洋子（EU キャンパス支援室長、グローバル地域文化学部教授）



■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター **CONSCIENCE**

E-mail : rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践

## 講師略歴

### 小原 克博 (こはら・かつひろ)

1965年、大阪生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。博士(神学)。現在、同志社大学 学長、神学部教授、良心学研究センター長。

公益財団法人大学コンソーシアム京都 理事長、一般社団法人日本私立大学連盟 常務理事、公益財団法人大学基準協会 理事、President, the Association of Christian Universities and Colleges in Asia (ACUCA)、日本宗教学会 常務理事、日本基督教学会 理事、宗教倫理学会 評議員も務める。

日本学術振興会 学術システム研究センター プログラムオフィサー(専門研究員)(2018-21年)、宗教倫理学会 会長(2016-18年)、京都民医連中央病院 倫理委員会 委員長(2003-09年、2010-18年)、同志社大学 一神教学際研究センター長(2010-2015年)、京都・宗教系大学院連合 議長(2013-2015年)等を歴任。

専門はキリスト教思想、宗教倫理、一神教研究。先端医療、環境問題、性差別などをめぐる倫理的課題や、宗教と政治およびビジネス(経済活動)との関係、一神教に焦点を当てた文明論、戦争論などに取り組む。神道および仏教をはじめとする日本の諸宗教との対話の経験も長い。

単著として『ビジネス教養として知っておきたい 世界を読み解く「宗教」入門』(日本実業出版社、2018年)、『一神教とは何か——キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』(平凡社新書、2018年)、『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』(晃洋書房、2010年)、『神のドラマトゥルギー——自然・宗教・歴史・身体を舞台として』(教文館、2002年)、共著として、島藺進ほか『徹底討論! 問われる宗教と“カルト”』(NHK出版新書、2023年)、同志社大学 良心学研究センター編『良心から科学を考える——パンデミック時代への視座』(岩波書店、2021年)、佐々木閑・小原克博『宗教は現代人を救えるか——仏教の視点、キリスト教の思考』(平凡社新書、2020年)、山極寿一・小原克博『人類の起源、宗教の誕生——ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき』(平凡社新書、2019年)、堀江宗正編『宗教と社会の戦後史』(東京大学出版会、2019年)、同志社大学 良心学研究センター編『良心学入門』(岩波書店、2018年)などがある。

[関連 Web サイト]

<https://www.doshisha.ac.jp/information/president/>

<https://www.kohara.ac>

<https://researchmap.jp/katsuhiko.kohara>

# 戦争と同志社——キリスト教主義学校の苦悩と教訓

(1930～1945年)

小原克博

## 1. はじめに

### 1) 時代区分について

十五年戦争(1931～1945): 満洲事変(1931)、日中戦争(1937～45)、太平洋戦争(1941～45)の全期間を一括する呼称

### 2) この時代において何を見ようとするのか

「同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」(『同志社百年史』通史編一、「序」同志社総長 上野直蔵)

上述の「同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分」が、ここで取り扱う時代、とりわけ1935年以降に集中している。この時代、キリスト教主義とリベラリズム、あるいは「新島精神」(当時の新聞に頻出)は守られたのだろうか。

これら「同志社精神」をめぐる解釈の変化や時局に対する妥協を、同志社内部の出来事にとどめず、日本社会や世界における変化と対応させて考え、そこから現在および未来に対する教訓を抽出していく。ここでは、朝鮮半島、台湾、ドイツとの関係に着目する。今後、同志社あるいは日本がアジアとの関係を強化していこうとすれば、自国史に閉じることのない的確な歴史認識が求められることになる。例: タイにおける泰緬鉄道

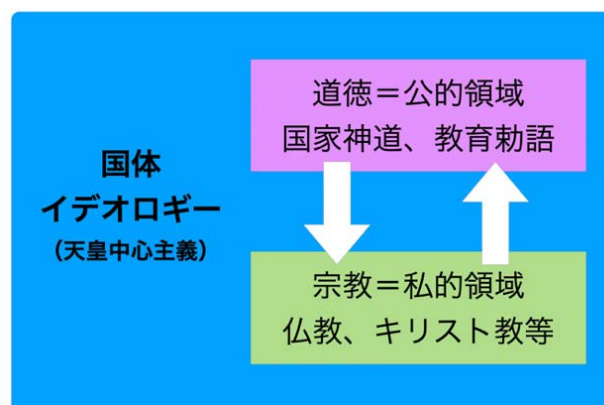
## 2. 戦時下の同志社

### 1) 同志社の国際交流と時代の変化

- ・ 栄光館の建設(1930)、アーモスト館の建設(1932)等
- ・ 軍部の台頭とファシズム: 満洲事変(1931)、滝川事件(1933)

### 2) 数々の事件(同志社事件)の勃発

対立の構図: キリスト教 vs 国体(天皇制、教育勅語)



以下、いずれの事件においても、配属将校の暴走、学外者の介入、メディアによる批判が共通して見られた。

・湯浅八郎総長就任（1935）

・武道場神棚事件（1935年6月）

同志社では、武道場が1935年に再建され、それまで道場の正面に新島襄の肖像画が掲げられていたが、完成披露の前夜に、一部の学生が無断で神棚を設置した。校長が学生を説得して神棚を取り下げるようになったが、これを聞いた配属将校の三浦国男中佐がこれを問題とし、我が国の国体精神に反すると反発した。三浦中佐は神棚の設置が認められなければ配属将校を引き上げると主張した。配属将校の引き上げは徴兵猶予の特典の取り消しを意味した。同志社総長に就任したばかりの湯浅八郎は、同志社精神は日本精神と一体であり、従来通り新島の肖像画を掲げることを了承してほしいと主張した。しかし、師団司令部に呼び出され、神棚を設置するように諭され、遂に理事会でもそれが承認され、新学期より武道場には神棚が設置されるようになった。

・国体明徴論文掲載事件（1936年1月）

法学部の学術機関誌『同志社論叢』第51号にマルクス主義を排除する内容の助教授の論文が「学術論文たるの体裁」を成さないという理由で掲載不可となった。これに対して、法学部では二つのグループに分かれて対立した。掲載不可の判断を下した編集委員を支持した湯浅総長に対して、当該の助教授は学外の右翼団体と連携して湯浅総長排斥の運動を起こした。湯浅はこの助教授に対して「学問識見共に大学教授たるに適せず」という理由で解職処分にした。

・勅語誤読事件（1937年2月）

軍部や右翼が湯浅総長批判をする中で、1937年2月の紀元節の日に、教育勅語の最後の「御名御璽」（ぎょめいぎょじ）を湯浅は軍部をからかう意図で「おんな、みしるし」と読み、「勅語誤読事件」として騒がれ、学内で湯浅に反感を持った人々と、愛国団体などが同志社に押しかけて湯浅に総長辞職を迫った。

・「同志社教育綱領」（1937年2月26日制定、3月3日公表）

配属将校の草川靖中佐が同志社綱領第3条「同志社はキリスト教を以て徳育の基本とす」の改正を求めてきた。これに対して湯浅総長は1937年3月3日に「同志社教育綱領」（『同志社百年史』資料編二、1691頁）を発表した。湯浅は敢えて「同志社綱領」を守る意図で「同志社教育綱領」を発表したのであるが、多くの新聞は「同志社の変節」または「軍部圧力への屈伏」と見なした。

#### 同志社教育綱領

- 一 同志社ハ敬神尊皇愛国愛人ヲ基調トシ之ヲ貫クニ純一至誠ヲ以テスル新島精神ヲ指導原理トス
- 一 同志社ハ教育ニ関スル勅語並詔書ヲ奉戴シ基督ニ拠ル信念ノカヲ以テ聖旨ノ実践躬行ヲ期ス
- 一 同志社ハ基督ノ真精神ヲ信奉ス
- 一 同志社ハ敬虔自治日新中正ヲ以テ学風トス
- 一 同志社ハ良心ヲ手腕ニ運用シテ国家社会ニ貢献スル人物ヲ養成スルヲ目的トス

昭和十二年二月二十六日制定 三月三日公表  
教育綱領制定に就て

同志社総長 湯浅八郎

・上申書事件（1937年3月）

法学部内の保守派の教授が田畑忍ら4名の法学部教授を「同志社教育綱領」（特に教育勅語の奉戴）に反すると主張し罷免を求める「上申書」を提出した。

・チャペル籠城事件（1937年7月）

国粹主義を主張する予科生330名が配属将校に扇動されて、①総長の退陣、②キリスト教儀式の廃止、③左翼教授の処分を求めて学生大会をチャペルで開催、籠城した。結果として、四大節の儀式に讃美歌と祈祷が廃止された。

・彰栄館の一室に奉安殿を設置

・新村猛、真下信一教授の検挙

【参考】1933年には住谷悦治が治安維持法で逮捕され、辞職している。

・湯浅総長退陣（1937年12月）

・新島先生永眠50周年記念事業（1940年）

「新島先生が明治の実利主義的大勢に抗して勇敢に標榜せられた精神主義は、**儒教**によって洗練された我国の伝統的精神主義を、**基督教**によつて深めたものであった。」（魚木忠一・講演「教育の源流として見たる新島先生」、『同志社百年史』1169頁）

【参考】日野真眞澄『教育勅語の大義と基督教主義の教育』（基督教研究会、1931年）でも、教育勅語や儒教とキリスト教主義の両立可能性を語っている。

【参考】「而してかくのごとき教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得べき者にあらず、また既に人心を支配するの能力を失うたる**儒教主義の能くすべき所にあらず**、ただ上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道徳に存することを信じ、**基督教主義**をもって徳育の基本と為せり。吾人が世の教育家とその趨を異にしたるもここに在り。」（「同志社大学設立の旨意」1888年、『新島襄 教育宗教論集』21-22頁）

・良心碑の建立（1940年11月29日）

「紀元二千六百年」徳富蘇峰が中心となって建立。

「動くも目的のため、また、忍びて待つも計画のため。今日もなお、待つ有様なるも、今となりては、ただ待つのみならず、農夫が田畑に**寒肥**をかくるがごとく、他日、収穫を得るだけの準備は、だいふ致し置き申し候。

政事上の実況は、実に実着なる**眞面目**なる男児の乏しきを覚え、ますます良心の全身に充満したる丈夫の起こり来たらん事を望んで止まざるなり。」

（「横田安止宛」手紙、一八八九年、『新島襄の手紙』300頁）

・財団法人同志社寄付行為の改正（1940年11月27日）

第一条を「**智徳並行ノ主義ニ基キ教育ノ業ヲ挙クルヲ以テ本財団ノ目的トス**」から「**教育ニ関スル勅語ヲ奉戴シ聖旨ヲ遵守シ教育ノ実績ヲ挙クルコトヲ以テ本法人ノ目的トス**」に改める。

### 3) 総力戦体制下の同志社

- ・教学体制の変更

1940年、大学文学部の改組。神学科は縮小。文学部神学科社会事業学専攻は、文学部文化学科厚生学専攻に変更。

1944年、外事専門学校、同志社工業専門学校（理工学部の前身）の設立。

- ・同志社修練団の結成（1941）「国体の本義に透徹し立学の精神に副い国家に献身する有為なる学徒の錬成を期し集团的修練を行ふ」

- ・報國隊の結成

- ・外国人教師の追放

- ・学徒出陣（1943）

文科系の専門学校以上の学生・生徒の徴兵猶予の特典は撤廃され招集された。日章旗寄せ書き。「新島先生在さば、恐らく『我も征くぞ』と仰せられ、諸君の陣頭に立たるゝことは疑ひありません。」（牧野虎二）

- ・女子部

1940年、「デントン先生功績表彰パイプオルガン贈呈式」（デントンを派遣していた米国太平洋婦人伝道会からの贈呈）。

1944年、生徒は軍需工場に動員。動員先で讚美歌を歌い、密かに礼拝を守っていた生徒たちもいた。

## 3. アジア、世界を視野に入れて

### 1) 韓国——尹東柱を中心に

韓国の国民的詩人として知られている尹東柱は、1917年、「満州」北間島<sup>フツカンゴ</sup>で生まれ（祖父の代からのクリスチャン一家の長男）、幼少期をそこで過ごし、1938年、延禧<sup>ヨンヒ</sup>専門学校（現在の延世大学）文科に入学し、1941年に卒業した（在学中に朝鮮語授業の廃止、「創氏改名」を経験）。1942年4月、立教大学文学部英文科に入学、同年10月、同志社大学文学部文化学科英語英文学専攻に転入学し、在学中、ハンブルグでの詩作活動を続けた。1943年7月、抗日独立運動の思想犯として京都下鴨警察署に逮捕され、1945年2月16日、福岡刑務所で獄死した。

1947年に尹東柱の詩が初めて公にされてから、彼の代表的な詩集『空と風と星と詩』は広く読まれるようになり、中学・高校の教科書にも掲載され、韓国において彼の詩と彼の人生は多くの人に影響を与えるようになった。

同志社大学では、こうした歴史的経緯を踏まえ、尹東柱の没後50周年の1995年、尹東柱の詩碑建立に協力をした。尹東柱の詩碑建立の運動は「同志社校友会コリアクラブ」（現在の「同志社コリア同窓会」）「尹東柱を偲ぶ会」が中心になって展開され、その切実な願いを、当時の同志社総長、同志社理事長、同志社大学長が受け入れた。

今も、韓国から多くの高校生や観光客が絶えることなく本学の尹東柱詩碑を訪ねている。2025年2月16日、尹東柱の没後80周年を迎える。同志社は2025年に150周年を迎えるにあたり、その中に戦争の時代があり、多くの学生がその時代の犠牲者となったことを忘れることはできない。2025年、日本社会が戦後80年を振り返る中で、また、尹東柱詩碑建立30周

年を記念する中で、本学はその歴史の中に尹東柱がいたことを記憶し、歴史の教訓を心に刻みながら、新しい時代を展望すべきであると考え、2024年12月、同志社大学は尹東柱に対し名誉文化博士号を贈呈することを決定した。

### 序 詩

死ぬ日まで天を仰ぎ  
一点の恥じ入ることもないことを、  
葉あいにおきる風にさえ  
私は思い煩った。  
星を歌う心で  
すべての絶え入るものをいとおしまねば  
そして私に与えられた道を  
歩いていかねば。

今夜も星が 風にかすれて泣いている。

(1941.11.20)

(『尹東柱詩集 空と風と星と詩』金時鐘編訳、岩波文庫、2012年、9頁)

### 十字架

ついてきていた日射しだったのに  
いま 教会堂のてっぺんの尖の  
十字架にひっかかりました。

尖塔があのようにも高いのに  
どうすれば登っていけるのですか。

鐘の音も聞こえてはこないのに  
口笛でも吹きつつほっつき歩いてて、

苛<sup>こ</sup>まされた男、  
祝福されたイエス・キリストへの  
ように  
十字架が許されるならば

首<sup>くび</sup>をもたげて  
花のように咲きだす血を  
陰ってゆく空の下で  
しずかに垂らしています。

(1941.5.31)

(同書、23-24頁)

## 2) 台湾——台湾留学生を中心に

戦前、700名を超える台湾留學生が同志社で学んでいた。最初の留學生は、1905年に同志社普通学校に入学した周再賜。台湾で高等教育を受けることのできない者たちが日本に向かった。京都是東京に次いで台湾人留學生の多い場所であった。

長老教中学(英国長老教会による設立)と淡水中学(カナダ長老派宣教会による設立)からは多くの留學生が同志社に来ていた。

1930年代に入ると、台湾総督府は皇民化政策をさらに強化し、日本語の全面使用や神社参拝を強要した。長老教中学や淡水中学といったキリスト教学校は、同志社に先立って排撃の対象となった。

植民地支配の中で、日本の教会は台湾基督長老教会と連帯することなく、台湾人キリスト者に対し、国家への服従を指導した。

## 3) 国家とキリスト教——ドイツを事例に

・「日本的キリスト教」と「ドイツ的キリスト者」との比較

・ドイツ的キリスト者(Deutsche Christen)

ナチスが選挙で躍進した1930年頃から始まった運動。

ドイツ的キリスト者信仰運動の基本原則(1932年)

領邦教會的分裂を克服し、一つの福音主義的帝国教會を創設する。

ユダヤ人はキリスト者の共同体に所属しない。

人種・民族・国民は神から与えられた生の秩序であり、人種の混合に反対する。

無能者、低価値者に対抗して民族を守る。

世界市民主義・平和主義・国際主義を排する。

・本質的な問い：国家への従順か、反逆か

「良心の宗教」としてのプロテスタンティズム

ここでの「良心」は秩序に順応する儒教的「良心」ではなく、自立した個人の深い信念に根ざし、秩序に抗うこともある「良心」(conscience)(例：良心的兵役拒否)であることに注意。

【参考】ヴォルムスの帝国議会(1521)でのルターの答弁

教会や公会議はしばしば過ちを犯した。だから聖書の根拠、または明白な理性によって納得させられない限り、良心に依然として証拠を確信している。私の良心は神の言葉に縛られている。良心に逆らって行動することは確実ではないし正しくもない。それゆえ私は何事も取り消すことはできないし、また、そうしようとは思わない。私はここに立つ。私に他の在り方はない。

【参考】新約聖書

そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」(使徒言行録23:1)



【参考】金芝河「良心宣言」(1975)

自由と平和を愛する、全世界の良心ある隣人たちは、われわれの孤独な、苦難にみちたたたかいに惜しみない支援をよせてくれるだろう。この時代にもっとも必要なものは、真実、そしてそれを愛するがゆえにたえなくてはならない受難にたいする情熱である。

人間の自由と解放のために、全民衆が渴望し待ちあぐんでいる、民主主義の勝利のために、われわれのすべてのものをささげようと私はいいたい。

われらすべての健闘のために、私は今日も祈っている。

一九七五年五月

金芝河

(金芝河他『良心宣言』(井出愚樹編訳) 大月書店、1975年、44頁)

#### 4. まとめ——現在そして未来に備えるための教訓

- 1) キリスト教主義と国際主義の連携
- 2) 平和主義の再構築
- 3) 自由の拠点として大学
- 4) 戦前と戦後の断絶と連続性——戦後、戦争の時代とどのように向き合ったのか  
例：湯川秀樹：戦中、軍事研究に関わり、戦後、平和運動を牽引。

「今日の科学者の最も大いなる責務が、既存の科学技術の成果を出来るだけ早く、戦力の増強に活用することにあるのは言を俟たない。併しその反面に於いて科学の真の根基をわが国土に培養するのでなければ応用さ[れ]るべき科学、技術の源泉は久しからずして枯渇するを免れない。」  
(「科学者の使命」、『京都新聞』1943年)

↓

「国家目的乃至はそれを実現するために取られる手段が正当化されるには、少なくともそれ等が人類全体の福祉の増進と背馳しないことが必要である。」(「静かに思ふ」、『週刊朝日』1945年11月4日)

「今まで多くの理科系統の学者に接してきた私の偽らざる気持ちは、個々の専門を離れて大きな立場から——しかも学者としての公平さと正確さとを以て——自然や人事を論じ得る人は余りに寥々たることであった。」「真理の探究に精進する人には、自己の研究を通して自然や人事の百般を見る目が開けてくる筈だ。」(「科学日本の再建」、『科学朝日』1945年10月)

#### 【参考文献】

宇治郷毅『詩人尹東柱への旅——私の韓国・朝鮮研究ノート』緑蔭書房、2002年。

小沼通二『湯川秀樹の戦争と平和——ノーベル賞科学者が遺した希望』岩波ブックレット、2020年。

駒込武「戦時同志社再考——帝国史の視点から」、『キリスト教社会問題研究』第62号、2013年、103-134頁。

阪口直樹『戦前同志社の台湾留学生』白帝社、2002年。

**■公開シンポジウム「同志社の再建と学生運動の時代」**

(連続シンポジウム「同志社150年の歴史から展望する未来への挑戦」第5回)

日時：3月26日(水) 17:00~19:00

場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館RY地下1 & Zoom ウェビナー

講師：林田明(同志社大学名誉教授)、中村信博(同志社女子大学 学芸学部 特別任用教授)

司会：小原克博(同志社大学 学長、良心学研究センター長、神学部教授)

コメンテーター：

山下貴子(同志社大学大学院ビジネス研究科教授)

河村晴久(能楽師、観世流シテ方、同志社大学 客員教授)

詳細は、<https://ryoshin.doshisha.ac.jp/jp/activity/20250326/>